

楠本碩水：九州における最後の崎門学者

福田， 殖
九州大学

<https://doi.org/10.15017/18106>

出版情報：中国哲学論集. 14, pp.1-18, 1988-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

楠本碩水

——九州における最後の崎門学者——

福 田 殖

(一)

徳富蘇峰は大正十二年八月「月田蒙斎」という随筆を書いているが、その中で次のように述べた。

山崎派の本山とも云ふ可きは、京都の望楠軒であった。望楠軒の主盟は、若林強斎・西依成斎而して最後に梅田雲浜だ。若し夫れ九州に於ける山崎派の学統は、肥後の月田蒙斎より、肥前の楠本碩水に至り、延いて今日に及んでゐる。要するに月田蒙斎は、山崎学派に於ては、其の後勁の一人だ。彼は学行両ながら、崎門の先輩を辱かしめざる一人と思ふ。^①

蘇峰が「延いて今日に及んでゐる」というのは、碩水の門下に岡直養、内田周平をはじめ、崎門（山崎闇斎学派）の学統が脈々と継承されて今日に至っているの意と解される。

内藤湖南は昭和七年十二月二十七日、京都府教育会主催による日本教育講座特別講義の中で「山崎闇斎の学問と其の発展」と題する話をしている。湖南はその冒頭において「この十月十六日に、闇斎先生に関する講演を引受け」たいきさつを述べて次のようにいう。

今日の学界で、さういふことの任に当る方は、東京の内田先生であつて、その外に、あまり人に知られて居りませんが、岡次郎といふ人があります。この人は、やはり内田先生の先生である肥前の楠本碩水先生の門人であります。今日でも、山崎学派の書物を色々出版して居られます。その度に、私は幸ひ頂戴して居りますが、非常に篤学な人であります。かういふ人が適任である。^②

右の文中、内田先生は内田周平のことであり、岡次郎は岡直養のことである。楠本碩水は、いわば九州における最後の崎門学者と言えるであろう。その学統はさらに内田周平・岡直養^④に受け継がれ明治・大正を経て、昭和にまで生き続けていったのである。その点に関しては、丸山眞男氏が、

十七世紀後半にすでに門弟六千人といわれる一大学派を形成した崎門は、歴史的な継続性においても近世にその比を見ない。その学統は連綿として明治以後にまで、ほとんどきれ目なく継承されている。^⑤

と指摘しておられるように、崎門の学問的伝統の史的継続性は近世儒学の中でも独特な存在であったといえる。

明治維新（一八六八年）を境に西洋をモデルとする工業化を急激に進めるため、徹底した制度改革が行なわれた。こうした大きな社会的変化の中で伝統文化の価値は見失われていった。そのような激変の時代に楠本碩水は時流に乗ることをかたくなにこぼみ一人の崎門派の儒学者として誇り高く、理想を求めて生き通した。碩水は自らの原理に従って権力も、富も、名声もとめず、心温く、批判精神をもって生き通したのである。崎門派の朱子学者として一貫して生きた碩水は、学問の道は気質を変化（人格を陶冶）することであると、そのためには読書窮理という知的功夫と共に存養省察という身心に深く根ざす体認自得の功夫も同時に大切であるとした。そうしなければ口耳記誦の俗学に墮すると考えたからである。彼はまた宇宙（天）と個人（人）との相関一致を求める儒教徒であった。これらは同じく崎門派の朱子学者であった兄の楠本端山と思想的に変るところはなかった。伝統教学としての儒学の仁義礼智という道徳的原理こそ人心の固有のものであり、性命の定理であるとし、天地の間には一正理があるのだとする正学意識から異端俗学の徒を批判し、功利、縦横、因循軟媚の士を攻撃する。端山・碩水ともに居敬（内と外とを合する敬の功夫の重視）と窮理（天^⑥宇宙と人^⑦個人とを貫く理の究明）を車の両輪、鳥の両翼のように必要不可欠なものと考える崎門学者であったが、兄の端山が温然の気が顔色にあふれるほどの温厚篤実な人物であるのに対し、碩水には狷介とは言えないまでも、過激で、気難しいところがあった。^⑧それは気質というよりも、むしろ世界と人間に対する自己の真情の率直な発露が鋭くきしみ合った結果であると思われる。例えば兄の端山が強諫したにも拘らず、家禄の返上をした事（後述）などはその具体例である。碩水は勇氣と決断をもって精神の自由を得ようとした。碩水は結局、維新後の時流に乗らなかつた。尊王大義という『春秋』の精神を持ち続けたことも、その一因として考えられる。彼は維新後、現実の

政治に関与することなく、隠者の道を選び、百年の後に知己を待つと言ひ、維新後に急速に進められた文明開化という名の西洋化による人心の退廃と功利追求の風潮を痛烈に批判した。

楠本碩水については、藤村禪氏に詳細な評伝『楠本碩水伝』(芸文堂 一九八七)があり、楠本端山と碩水の学風ならびに当時の学術思想界の状況については、岡田武彦氏に『楠本端山』(叢書・日本の思想家42・明徳出版社 一九七八)及び「楠本端山・碩水兄弟の生涯と思想」(『江戸期の儒学』所収、木耳社 一九八二)があつて詳述されている。従つてここでは、明治維新という激しい社会的変化の中でも変ることなく自らの原理に従つて生き通した一崎門学者・楠本碩水の生きざまに関する一、二の問題について考えていきたい。

(二)

明治十四年(一八八一)碩水数え年五十歳の時の「元日」詩は次の通りである。

四十九年未だ非を覚えず

頑然たる故態、時と違ふ

寒梅は平生の色を変えず

独り春風を逐へて曙暉に映ず

碩水は自己の信条を貫き通した中国古代の自由人のように、自由な精神を抱き、針尾島の自然の秩序の中で生きようとしてゐる。

岩国の陽明学者で親交のあつた東沢瀉(一八三二—一八九二)は「夙に經学に志し、深く紫陽(朱子)を信ず。紅塵を超脱し、白雲に高臥す。吾が吉甫(碩水の字)のごときは、今の古人と謂ふべし。余の交はる所は多からずと為さざるも、まことに未だ其の儔を見ざるなり。」と碩水を「今の古人」と評した。碩水が「紅塵(俗世間)を超脱し、白雲(脱俗界)に高臥す」るようになったのは、いつのことであろうか。碩水七十一歳の詩「七十自寿」には「人生七秩また何をか貪らん。帰隱経年三十三」とあり、明治三十四年七十歳の時の詩「明治辛丑正月二十六日は余七十の生辰なり。

門人子姪、賀筵を開かんことを請ふ。賦して以て之に示す」には「余年三十九、都門に冠を掛けて帰る。学ぶ所、用ふる所に非ざることを、早く已に其の幾を見る」とあるのによれば、碩水は明治三年三十九歳の時から「白雲に高臥する」生活に入ったことになるであらう。

明治元年から明治三年にかけての碩水は、有能な若い儒学者として繁忙を極めていた。明治元年碩水は藩論を代表する松浦藩貢士として上京、ついで会計官出任租税司判事、学校御用掛、漢学所講説官を歴任、その間に学制を議し、『論語』を講義した。明治一年は一度平戸に帰国するが、九月に再び上京、十二月には大学少博士心得に任ぜられた。明治三年八月に京都の大学校代が廃止されたのにもない、九月帰藩する。前述の「都門に冠を掛けて帰る」とはこの時のことである。この三年間に碩水は、三条公はじめ公卿貴族に謁見したり、各藩の人士に会ったりしている。この間各藩の人士や少壮華族で碩水に入門する者が二十数名あった、という。碩水が儒家的経世活動にとめるのは、この時期までで、これ以後は故郷針尾島に帰り、再び仕官することなく、子弟の教育と農耕に従事する隠遁生活に入り生涯を終える。

この年に但馬の陽明学者池田草庵にあてた書簡がある。

昨年三月復姓以後、常禄は指出居候処、当閏十月、新知下され候得共、心に任ぜざる底候筋之れ有り候に付、直に返上仕、格禄共に指出、只今にては全然たる処士の身分と相成、故郷針尾島え引入、梅林と申処に住居仕、梅林山莊と名づけ申候。此処南面の地にて、後は山に傍ひ、前は海に臨み、海を隔るの諸山は庭前の仮山の如く、海は一里四方の湖水の如く、風波の險も絶て之れ無く、四時共に小艇を泛べ釣を垂れ候に、至極宜敷御座候。：先年より此処住居の心得に御座候間、梅林山莊の顔面も一斎翁に相頼之れ有り。早速に掲げ申候。実に宿年の素志を遂げ候間、是れより以後、静坐読書専要従事仕るべく候。小塾を開き候に付、余力には諸生教授仕るべく存じ奉り候。

碩水は佐々家の養子となること二十六年にして、明治二年三月楠本姓に復姓した。明治三年、復姓後無禄であった碩水に家禄が賜与された。同年閏十月二十四日のことである。同月二十八日、碩水は役職及び家禄の一切を辞退した。そして隠逸生活に入ったのである。当時、兄の楠本端山は藩の要職にあり碩水の行為を不可とし、当然物議をかもし

だが、碩水の棄祿の意志は変らなかつた。この時碩水は勇氣と決断をもって、自己の信条に生きたのである。碩水は権力も富も名声も求めず、ひたすら自己の内なる原理を守り続けようとしたのである。

その内なる原理とは何であつたか。『過庭余聞』^⑧は碩水の嗣子楠本正脩の記録した碩水の語録である。その中で碩水は言っている。

端山も多分と云ふことは余り説かれなだぞ。予は名分説ぞ。天下国家の上も名分で立つぞ。一家一身の上も名分で立つぞ。名分でなければ何事も立たぬものぞ。をかしいことになるものぞ。学者もあんなものかと人が笑ふぞ。それを知らずによい気になつて居るぞ。

予が尊王説も名分からぞ。幕府大名を嫌ふも名分からぞ。

予は祿を棄てたのぞ。世の奉還したとは違ふぞ。其の時は大分異議があつたそう。許しがなひでひま取つたことぞ。予は決然顧みなんだ。端山も権大参事であつたが。不満であつたぞ。この棄の文字が大事ぞ。

大名は賊臣ぞ。朝廷の復古も大名の力を藉りて出来たものゆゑ。如何ともしがたいぞ。華族に列して得意で居るぞ。をかしいことぞ。

右の文によれば、それは「名分」意識ということになる。端山も碩水も月田蒙齋を通して三宅尚齋派の崎門学を継承している。端山は碩水宛書簡中において「此の学は尚齋先生一意に相立度」^⑨と三宅尚齋を中心にするのであるけれども、碩水のこうした「名分意識」はむしろ浅見綱齋に近い。碩水の狷介にも見える処世術は、人間関係にも、「名分意識」を求めていたからである。明治四十三年十二月一日、浅見綱齋二百年祭が国学院大学講堂で行われ、この日、綱齋に從四位が追贈された。碩水に「浅見綱齋先生二百年祭、此れを賦して莫に代ふ」^⑩という詩がある。

闇門（闇齋学派）の伝統、三賢を称す

就中先生最も卓然たり

虚高に馳せず迹に泥まらず

广大と精微両つながら相全し

大義名分は平生の志

溢れて靖献一部の編と爲る

志士の感情由りて以て起り

中興の業功鮮からず(後略)

「大義名分」説は儒教経典の一つである『春秋』から發出するものである。中国では宋学、特に程朱学できびしく問われ、日本でもその影響を受けた。江戸儒学では「大義名分」意識は、崎門と水戸学にとりわけ顕著で、崎門の中では浅見綱斎派が群を抜いて強烈であった。その行動の規準として書かれた『靖献遺言』は幕末憂国の志士に熟読された。碩水が「蓋し本朝名分の説は山崎闇斎に始まり、浅見綱斎及び其の門人若林強斎に盛んなり」という通りである。明治十五年碩水は平戸の猶興書院の教授を引受け四月三十日に『春秋胡氏伝』の講義をしている。『春秋胡氏伝』は北宋末から南宋初期に生きた胡安国(一〇七四—一一三八)の畢生の著述であり、朱子から「胡春秋、大義正し。」(『朱子語類』八十三)と称されているように南宋の激動期に「大義名分」を強調した書である。碩水は後に「説春秋胡氏伝」なる一文を「道学協会雑誌第四十四号」(明治二十四年刊行)に載せているが、その中で愛新覚羅氏が明の天下を奪ってから、『春秋』の諸説を採取して一家を主とせず、胡氏を駁正して以来、博聞多識の考拠の説が盛んとなり、大義名分の何たるかを知らない状況に至り、日本の学者もその説に影響を受け、胡伝を講ずる者がいない、と嘆いている。この頃碩水は並木栗水にあてた書簡の中でも同じようにいう。

春秋胡伝は数年来校訂仕度心得に候得共、未だ相果し申さず候。此書今日に当り尤も読まざるべからざるなり。清朝にては禁物に付彼此と異議を生じ、本邦の儒者も其言に瞞着され此書を読む者甚少也。嘆かざるべけんや。

……後來の刻本は皆原書を乱り候て困り物に御坐候。

碩水は『春秋胡氏伝』の信頼するに足る底本をつくらうとしたようである。碩水の「大義名分」意識は純正朱子学ともいふべき崎門学にその根底をおくものであった。したがって、宇宙論、存在論としての理気心性の深い究明、理非曲直を峻別する道德的価値観、それに伴って義と利、公と私、聖と俗、正統と異端との厳密な弁別がなされなければならなかった。碩水は池田草庵にあてた書簡(慶応元年)の中で

兎角斯学天下に明かならず候へば、因循苟且の徒は申すに及ばず、世の所謂尊王攘夷と相唱候者共、何れも私意

を挟み、困り入候世の中と相成、嘆息此事に御座候。

という「斯学」(儒学)の不明を根源的に問うことがきびしく求められているのである。崎門学を尊信する端山も碩水と同様の立場にいた。池田草庵にあてた書簡(明治元年)の中で「何分外事紛擾開眼し難き景光にて、儒学流行の体相見得申さず、権謀術数の世上と相成り候。所謂徹士の輩、皆智謀の末務に馳逐仕、御国体上より紀綱振起の気味見受申さず、杞憂の至に御座候。何れ有志の正学者山林中に韜晦、精切真修、時節を待候外之れ無き事に愚考仕候。」と述べ、翌明治二年草庵宛書簡では「近来承候へば、東京大学校孔孟程朱の訓相廃、專異教御出張の由。此大根本の地、か様相動ては如何如何。」と嘆き、明治四年草庵宛書簡では「天下の形勢逐日所謂開化などの新説流行にて紀綱頹敗、吾聖賢の道、地を掃ふの勢に馴致し、如何とも致し難く天を仰いで烏々仕候外之れ無く、……因て後覚(端山の名)には書生教導上、別て厳正、時好に投じ候書籍一切嚴禁旧に依りて孔孟程朱の正脈のみ講習罷在り候。」と時好に投じない自己の立場を表明している。端山が碩水にあてた書簡によると「洋風はどこも流行致易く、自然人心も浮薄に相成り、廉恥の事、地を掃ひ候様相見得、別して恐怖の事に御坐候。……矢張納翁の關邪、適中仕居候様存じられ申候。」と大橋訥庵の『關邪小言』を引用して洋風の流行を批判した。この点においては碩水も同意見であった。端山や碩水は一八六八年の明治維新による急激な社会的変化の中においても自己の信奉する儒学的伝統を改変することはなかったのである。

端山や碩水のこうした態度は、きわめて閉鎖的、保守的であって、こうした立場を貫き通すことは、文明開化が進展する時代背景の中では決して有利な選択ではなかったはずである。たとえば同じく儒教思想を一面で強調して活躍した一、二の思想家と比較すればその差は一目瞭然となる。佐倉藩士の家に生まれ、儒教的な国民道徳運動を推進した西村茂樹(一八二八—一九〇二)も漢学と洋学をあわせ学んでいる。東京外国語学校の校長に就任した中江兆民(一八四七—一九〇二)は学生の規律が乱れているのを見て、日本では孔孟の教を根幹として国民の徳性の涵養をはかることが必要だと主張したが、一方で兆民はフランス自由思想を積極的に学びとる一面を有している。比較して明かなように彼等の方がより開放的・進取的で時代の要請に合致する生き方であったように見える。次に端山・碩水の上記のような態度の成立について考えていきたい。

崎門は朱子学を信奉しながら、その尊信、造詣、流伝の点において他の朱子学派（例えば、林家や木門）から自派を區別し、「道学」という名称をその学に冠した。碩水の「日本道学淵源録」の序によれば、

本邦、朱学を奉ずる者、固より勤しと為さず。就中其の尊信の篤、造詣の深にして且つ流伝の盛なる者を求むれば、山崎闇齋一派の諸先生に若くは莫し。其れ朱子の経説及び文集語録に於て、熟読詳味、必ず底蘊を究むること、其の早晚定未定を論ずるに止まらず。

という。宝曆十二年（一七六二）留守希斎は「闇齋先生整域修補給工資姓名簿」の中で「寛文中、山崎闇齋先生存る有り。然る後、遠く濂洛閩閩（周・程・張・朱）宋学正統派」の統を接いで、道学の伝、復た皇倭（日本）に明かなり。」という。

『日本道学淵源録』はもと大塚観瀾が、朱子編集の『伊洛淵源録』にならって編輯した『本朝道学淵源録』に由来する。それを千手廉斎の第三子千手旭山が校補した際に「本朝道学」を「日本道学」に改めた。観瀾には、別に「本朝儒先録」及び「別録」があつて、旭山はこれら三書を総合して「樽桑儒海」と更名して月田蒙斎に伝えた。蒙斎は刻するに及ばずして、これを楠本端山・碩水に伝えた。碩水はこの「樽桑儒海」のうち「日本道学淵源録」を増補したが、「本朝儒先録」及び「別録」は補録しなかつた。「儒先録」上巻は藤原惺窩を首、林羅山がこれに次ぎ以下若干人を収め、下巻には南村梅軒を首とし「別録」二巻は中江藤樹、荻生徂徠を各々首となし、共に四巻であつた。「儒先録」を碩水が補録しなかつたのは、世の中にその原本があるからであつた（以上は昭和八年の岡直養の「例言」による）。直養はこの「例言」の中で「我国末学の真伝を知らんと欲せば、此の書を繙くに非ざれば不可なり。」とこの書物が編集された意図を強調している。

千手旭山は天保十三年（一八四二）に「日本道学淵源録」の序を書いている。そのはじめに「孔子の道は、子朱子を得て、而る後に天下万世に明かなり。」と「道学」を定義し、「知行」の二つを貫く「存養」が闇齋学の特徴である

と指摘。さらに徂徠学派の服部南郭の「此の邦、朱子の意を得し者は其れ唯だ山崎闇齋か。」と尾藤二洲の「洙泗（孔子）の微言、閩洛（程朱）の至論。剖析敷暢し、以て斯文を聞かにす。陰陽仁義、礼楽鬼神、究めざる所靡く、以て後人を啓く。於戲此の翁（闇齋）、儒林の宗なり。」の語を挙げて、南郭、二洲の発言を「天下の公論というべし」とした。ただこの序は日本道学の祖として闇齋を位置づけ顕彰する意図のもとに書かれている点は考慮しなければならぬ。したがって次は闇齋学派以外の立場からの観点をとりあげてみるべきであろう。

寛政元年（一七八九）六十三歳で没した那波魯堂は「闇齋、無用の用たるを知らずと謂べし。闇齋の如くならば、学問の道は唯勤善懲惡の四字にて済べし。」（『学問源流』）と闇齋を手きびしく批判した。魯堂の『学問源流』は、孔子の教が東来して盛んに行われるようになった平安期の延喜・天曆（十世紀）の頃から、元弘・建武（十四世紀）を経て、藤原惺高から江戸儒学の仁齋・徂徠、そして宝曆（十八世紀）に至るまでの儒学の流れを簡潔平正に叙述したものである。魯堂によれば、

万治（元年—一六五八）寛文（元年—一六六一）の比に及びて山崎敬義嘉右衛門出て、新説を建て、世間の朱子学と云は、茫然雜駁にして帰一ならずとし、朱子撰述の書に就て取る所を抄抜し、是は定説なりと専ら講求し、其余は未定の説なりとして、取用ひざること多く、凡そ読む所の書數種に止まり、歴史子書の類は一切に読に益なしとして之れを禁ず。玩物喪志の義なりとて、文章に力を用ひず。……詩賦の類は一向作ることを禁ず。唯四書朱注、近思録の類を専らとし、譬へば論孟の中にも、一貫の章、克己復礼の章、志学の章、養浩の章、性善の章と云類を、格別に力を用ひて講求し、互に是を論じ、其少しにしても敬義の説に合はざる者は、邪説として之れを退く。……其師説に至ては、講義講録とて、其辞を一一国字を以て之れを記し、互に写し取て秘本の如く之れを蔵す。其の説を信ぜざる者には猥りに是を示さず。是故に他の学者は同じく程朱を学ぶと称すれども、少しの異同なきこと能はず。……敬義の説に従ふ人は、十人は十人、百人は百人、幾誰に聞ても、印し出せる書画の如く一様なり。……其徒浅見綱齋、三宅尚齋の輩有て、是を教とし導く。敬義の号を闇齋と云に因て、是を闇齋派の学問と云。闇齋派の学問、朱子の書に於て、取舍する所はあれども、朱子の説を非とすることは無し。其学を尊信して従ふ者頗る多く、静座を為て、工夫を費すに至る。然れども世界を以て是を計らば、十分の三と云程行

はれ、其餘は皆元和・寛永以来の学問なり。

と、客観的批判的に闇齋学の特質を列挙している。この闇齋学の特質はすでに丸山真勇氏が指摘しておられるように、「反詩文主義、師説の絶対化・学習文献の狭隘さ・異説への不寛容・閉鎖性と排他性」とに要約される。さらに同氏は「まさに同じ傾向について価値判断の電極をきりかえれば、まったく反対の意味づけも可能なのである。」(同上)と、西依成斎の「行状」と平泉澄氏の書物を引用されている。このようなところに崎門学の史的継続性の秘密があるように思われる。碩水原輯、岡直養補訂の『崎門学脈系譜』は寛文から昭和十年代まで、崎門の学統が連続と切れ目なく続いていることを示す書物であるが、この書物を見ると、思想集団の系譜というよりも、教義集団の系譜の感がする。那波魯堂によれば崎門は朱子の学説を絶対視し、闇齋の学説を信奉する点において百人が百人同一の態度をとるといふ。学問伝授の過程において一種の刻印づけがなされたともいえよう。そこには教義集団の秘義性も感じられる。

那波魯堂は十八世紀の人で、岡龍州に師事し、はじめは専ら漢魏の古学を修めたが、のちに程朱学に移った学者である。明治二十一年(一八八八)並木栗水は碩水宛の書簡の中で闇齋学派について、次のような批判を行っている。

大抵崎門学者、往々虚高の弊あるが如し。先づ闇齋が晩に神道に墮落せしも、虚高の病と謂はざるべからず。其徒、惟先輩の筆記等を伝習して、自ら以て道を得たりとし、四書、小(学)・近(思録)も唯本註のみを読んで、末疏を読まず。概して元明以下諸儒を軽んずれば也。故に往々疏脱の弊あり。尊兄の如き、此輩には非るべし。然れども近似のものあるが如し。愚謂、集注を読むもの、末疏を読まざるべからず。末疏を読まざれば、集注の精微を得る事難し。況んや經文の意をや。但し末疏も互に得失あるべし。虚心以て潜玩すれば、其当否自ら知るべき也。猥りに自己の見を立て、先儒を軽詆す可らず。^⑧

栗水は大橋訥庵に師事した程朱学者である。魯堂から栗水まで約一世紀経過しているが、崎門以外の朱子学者の批判として同質のものを感ずる。碩水は崎門学者であったが、魯堂や栗水が批判する問題点について碩水なりに同意する所もあった。栗水への返書の中で碩水は「高嶮崎門学の流弊、弟も御同意に御坐候。」(明治二十二年)「崎門学者往々先輩の筆記等を伝習し自ら以て道を得たりとするとは実に笑ふ可きなり。」(明治二十四年)と述べている。また「崎門の諸儒、苟くも見る所有れば則ち主張すること太甚し。遂に先儒の説を以て一筆に勾断して以て不是と為す。此れ其

の長処も亦其の短処なり。」「崎門の諸儒、師説を確守し又能く其の意を發揮し、又必ずこれを（朱子）文集・（朱子）語類に徴して以て其の同異を断じて他に及ばざるなり。其の偶々先儒の説を引く者は参考の一端に備ふるに過ぎず。此れも亦崎門の崎門たる所以なり。」と言っている。崎門の長所が同時に短所になっている両義性について触れ、崎門の特色は師説の確守と朱子の学説を規準とするところにありとする。碩水は栗水と宋学の理気心性論について議論し、更に宋学の宇宙論・存在論の原点である周濂溪の「太極図」「太極図説」についての論議を行っていくが、碩水は崎門学者として終始、朱子の学説を規準とする態度は変えなかつた。また末疏を読むべきであるとする栗水に対して、碩水は次のようにいう。

又承るに、末疏読まざるべからず云々と。誠に然り誠に然り。然れども弟にも亦一説有り。凡そ經書を読むに、先ず本註を読み又これを（四書）或問、（論孟）精義、（朱子）文集、（朱子）語類に参じ、其の正意の所在を知り、然る後にこれを末疏に博考して可なり。弟往年末疏を読む事を好み、百万取集め其書も少なからず候。今日に至り候ては其無益なる事を知り、崎門の筆記も読み申さず候。（明治二十四年）^⑤

碩水はあくまでも「本註」主義で「末疏」などは参考程度にして本質を誤まらないようにすべきであるとした。碩水は栗水が朱子の『周易本義』を未定の書として「僕易に於ては専ら本義を墨守せず」という態度に不満で、「弟は前書にも申上候通り、一意に朱子確守に御座候間（後略）」と述べている。

前述の那波魯堂はまた「平生、学談を以て、他門の人に交はらず。唯其同朋と交はる而已なり」（『学問源流』）と崎門の閉鎖性に言及したが、碩水は陽明学者の池田草庵・東沢瀉等とも親交をもち、並木栗水とは深くつっこんだ議論をする開放性が見られる。しかしながら同じ崎門学派内部については、きわめてきびしい見方に立っている。例えば、稲葉黙斎―奥平棲遲庵―三上是庵と続く佐藤直方派の関東崎門学については鋭く批判的であり、その派がつくった道学協会には結局入らなかつた。

碩水は前述のように明治三年京都から帰省した後に家禄を返上し、翌四年梅林山荘を営んで隱逸生活に入る。明治五年から十年までの六年間は日記も廢し諸友との文通も絶ち、白雲に高臥する生活に入った。明治十二年四月、八年間の梅林山荘の生活を引き払い、江下村の親戚の家が空いたので、そこに移り、江西書院を作り、以後、少しく子弟の教育と農業に力を入れるようになる。

明治十四年十月の政変で大隈重信と三田の福沢派が政府部内から追われた。それより先、四月七日、河野文部卿が農商務卿に転じ、福岡元老院議員が文部卿となった。その福岡文部卿の下で儒教主義教育の復興の方針が打ち出された。明治十年西南の役の後にそういう動きが出てきており、福沢諭吉などは痛烈に批判するのであるが、明治十四年頃から明治政府は儒教の復活をしようとする。三宅雪嶺の『同時代史』第一卷、明治十四年(下)によるとこの年十二月二十日に中林栗園没す(七十六歳)とあり、維新後、栗園は「洋学が盛んに行はれ、技芸を先にし、孝悌の道を後にするを憂へ、当路者に上書し、且つ同郷の福沢諭吉に書を贈りて痛論せり。」という。西南の役後、一時的にせよ文明開化の反省期に入り一度はすて去られた旧思想が見直されたのであろう。

碩水の塾への入門者もこの頃から比較的に増えていくが、そうした世の中の動きと無関係ではないであろう。明治十四年の入門者は三十二名、十五年は十八名、十六年は四十一名、十七年は三十九名、十八年は二十二名、十九年二十四名、二十年は八名、以下年々減少し二十四年、二十五年はともに〇名、二十六年は二十四名、二十七年は〇名、二十八年、二十九年はともに三名、そして三十年には一名であった。

明治十六年六月に三上是庵門の石井周庵が中心となり、同門の土、池田謙蔵、芳賀高重、林田讓吉、吉川祐之、石川堅次郎、鈴木忠兵衛、宇高正郎、鵜沢専蔵、鶴岡精齋、木村利武等と謀り、道学協会を創設し、同年十一月になって「道学協会雑誌」を創刊した。

道学協会は孔孟程朱の道学を講明し、名教を維持するを主たる標的にして発足した会員制の學術団体で、道学を講

習するほか、道学先輩の墳墓の保存と遺事の蒐集、道学関係の図書及び遺物の蒐集保存、道学に関する先輩の遺書の刊行、道学協会雑誌の発刊等を主たる仕事とした。この道学協会創設も明治十四年十月の政変に何らかの関連があるであろうことは想像に難くなく、すでに指摘されてもいる。碩水の門人の内田周平や岡直養はしばらくして道学協会に入る。碩水も頼まれて「道学協会雑誌」に「読春秋胡氏伝」を載せるのはすでに前述した通りであるが、何故か道学協会には入らなかった。道学協会については、梅沢芳男氏の「明治時代の崎門学―道学協会を中心として―」にその創設から分裂、道学遺書、道学協会雑誌の創刊から廃刊まで詳しいので、ここには触れない。

碩水が何故、道学協会に入らなかったかを説明する書簡が二通ある。その一通は明治二十二年、友人の並木栗水宛の書簡である。

関東筋之崎門学と申ハ多くハ佐藤直方之一派ニシテ、稲葉黙齋ニ至テハ、其質ハ狂者ニ近ク其所得ハ異端ニ陥ル事ヲ免レズ。奥平・三上輩ハ真ニ仏見ニ過ギズト存候。経説ニ至テハ只々其意味合ヲ説キ立に而一向面白存不申候。弟モ道学協会ニハ加入不仕、門人之内入会之者モ有之候間、孤松全稿も間々一覽仕候得共、更ニ有益之書トモ覚ヘ不申候。且文字拙陋ニシテ意義難通処モ不少、絮々弁論可厭也。三宅尚斎一派ニ於テハ決而不然。

とまことにきびしい忌憚なき批判意見である。あとの一通も同じく栗水宛のもので明治二十五年に書かれており、ほぼ前書簡と同じ趣旨の文面である。碩水が道学協会に入らなかった理由はこの二通の書面で明らかかなように同じ崎門派でありながら、佐藤直方派の関東崎門学に学問的に不満であったのである。後に碩水が独自に『崎門学派系譜』を訂正増補し、また『日本道学淵源録』の増補に力を尽くすのはこのことと関係があると思われる。

楠本碩水は常に文明開化以後の日本社会の功利主義を痛烈に批判し、孤独ではあったが、崎門学者として彼自らの原理にしたがって生き通した。求心的に内に向かう碩水の精神は明治維新前後で断続することなく、持続し続けたといえる。彼は崎門派の朱子学者らしく、朱子一尊主義に徹した学風を終生守り通し、崎門学派の先哲遺著の校正編集に意を用いた。碩水は蔵書室である「守待室」の記を書いていう。

道は書に因りて伝はり、学は人に因りて興る。安んぞ百歳の後、これを読み、奮然として起ちて以て道学の伝に任ずる者有らざるを知らんや。

文明開化の今の世に古人の道を学ぶ碩水は世の中に用いられずして孤独であり、百年の後に知己があらわれるのを待つという。現実否定のゆえに隱逸者の生活に入った碩水は、明治二十年、並木栗水宛の書簡の中で、
他日、國史を修する者、幸に姓名を其の間に列すること有らば、則ち隱逸伝中の人ならん^⑧と述べている。

兄の端山は明治四年、池田草庵にあてた書簡の中で碩水の隱逸生活ぶりを記している。

謙三郎之義御尋被下、是者西京少博士之辞免後帰藩、山中に潜居、一二之生徒相聚講習之餘、或は田ヲ耕シ、或ハ山ニ樵シ、時有り海ニ漁シ、飄々然消光罷在候^⑨。

また碩水の「閑居」詩は彼の隱逸生活の一端を写してみせてくれる。

迂疎^{うそ}にして世に適^{かな}い難く

戸を閉ぢて塵譁^{じんわ}を避く

洗樹、明月を迎え

瓶を移して晩花を挿す

年豊れば酒を讓^{かか}すに宜しく

境静かなれば茶を煎^いるに好^よし

尽日 他事無く

閑^{ひま}に耽^ひして家を出でず^⑩

陶淵明をはじめ隱逸者の詩を愛した碩水は針尾島の森の自然の中でその自由な精神をうたう詩人でもあった。

〈注〉

① 『第二蘇峰隨筆』（民友社 一九二五）

② 『先哲の學問』（筑摩叢書316 一九八七）

③ 楠本碩水（一八三二—一九一六）天保三年正月二十六日、父平戸藩士の楠本祇伴、母中倉氏の第三子として針尾島（現長

崎県佐世保市)に生まれ、大正五年十二月二十三日死亡。享年八十五。名は孚嘉、字は吉甫、通称は虎三郎、後に謙三郎に改名。号は碩水、天逸。伯兄端山は五歳年長、仲兄梅窓は三歳年長。次弟松陽は四歳年少、末弟藤重は九歳年少。

④ 内田周平(一八五七—一九四四)安政四年十一月七日生まれ、昭和十九年十二月二十三日死亡。浜松生まれ。号は遠湖。明治十年秋、大学医学部予科入学。明治十四年、大学医学部本科入学。明治十七年十二月、医学部退学。明治十八年一月、文科大学選科二年に転入学。明治十九年七月、同選科卒業(三十歳)。同年東洋学会創立されるや、会員となり、十一月二十七日「宋儒理気弁」を講演。明治二十年、井上田了が哲学館(後の東洋大学)を創設するや、講師となり、中国哲学及びハルトマンの美学を講ず。明治二十三年、哲学研究会創設せられ会員となる。明治二十四年四月、道学協会に入る。同年八月、学習院教授に任ぜられる。明治二十五年九月、第五高等学校教授に転任。明治二十八年四月六日、楠本碩水を訪問。明治三十五年五月まで四回碩水を訪問。同年八月、第五高等学校教授を辞任。明治三十一年一月、また哲学館講師となる。同年十月、正誼塾を開き、『四書』『近思錄』『靖献遺言』を講ず。前後約三十七年に及ぶ東洋大学の教授、二十五年余に及ぶ慶応大文学部教授のほか、一時期、東京高師、東京帝大、国学院の講師を兼ね、広く子弟の教育に尽力。特に崎門派の学問及び精神の顕彰に務めた。著書は『寛政三博士の学勲』(谷門精舎 一九三五)『遠湖文髓』(正誼塾 一九四〇)ほか若干。論文多数あり。関係資料としては、佐伯仲蔵『遠湖先生喜寿記念蘭言彙芳』(谷門精舎 一九三三)梅沢芳男「内田・岡両翁の先哲遺書の刊行」(『伝記』四—十二—一九三七)柳田泉「明治文学と内田遠湖先生一四」(『書物展望』八、七一—〇)一九三八)竹山道雄「最後の儒者」(『心』六一—一)平凡社 一九五三)近藤啓吾「遠湖内田先生年譜」(油印 拾穂書院 一九七三)等がある。右の内田周平の略歴は近藤啓吾氏の同上書及び『近代日本哲学思想家辞典』(東京書籍 一九八二)とに依拠した。なお『近代日本哲学思想家辞典』の「内田周平」生卒年の記事のうち生年を「一八五四」「安政二」としているのは誤りで、近藤啓吾氏の「遠湖内田先生年譜」に拠って「一八五七」「安政四」とすべきである。

⑤ 岡直養(一八六四—一九四九)元治元年六月十二日生まれ、昭和二十四年一月十七日死亡。肥前平戸の人。字は子直、通称は次郎、号は彪邨、虎文斎。異父弟が漢口日報社長で『碩水先生遺書』の発行印刷をした岡幸七郎である。楠本端山の室、近藤燕は直養の母の姉にあたり、端山は義理の伯父にあたる。直養はやや長じて端山の門に入り、やがて碩水の教えも受けるにいたる。その間、明治三十二年、二十六歳の時、上京して川田鑿江の門に学ぶが、最も長い期間師事したのは楠本碩水であった。明治二十三年、上海に渡り、日清戦争に至るまで中国語の習得にはげみ、日清戦争がおこるや、通訳として従軍。従軍三年の後、帰国。上京して海軍軍令部に判任訳官として奉職。大正八、九年頃、海軍省を辞任。その後間もなく早稲田

大学高等学院の教授となる。昭和十五年三月、七十七歳で早稲田大学を退職。昭和二十年三月の東京大空襲にあり、四十八年の東京生活に別れを告げて長崎県針尾島に閑居。昭和二十四年数え年八十六で死亡。岡直養は七歳年長の内田周平に兄事して崎門派の朱子学の顕彰に尽力すると共に崎門派の先哲遺著の校正編輯出版に全力を傾注した。久米訂斎の『学思録鈔』や若林強斎の『強斎先生雑話筆記』等をはじめとする崎門派遺著の校定刊行と共に、特に『碩水先生遺書』等碩水関係の書物の校定刊行に生涯を捧げた。これらについては『楠本端山碩水全集』（葺書房 一九八〇）中の「解題」が詳しい。岡直養の著書として刊行されたものに『彪邨文集』（虎文齋 一九四〇）ほか二点、未刊のものに『彪邨諸稿』ほか二点ある。伝記資料としては、貞方研の「岡彪村伝」および赤塚光男の『岡彪邨翁と崎門の朱子学』（自費印刷 一九六〇）とがあり、右の略歴は赤塚光男氏の同上書に依拠した。

⑥ 『闇齋字と闇齋学派』（『山崎闇齋学派』日本思想大系31 岩波書店 一九八〇）

⑦ 碩水は後年、昔、はげしく大橋訥庵を批判したことを回想して「余、年壮なるとき、まことに過激に失す」（『大橋訥庵二俗簡巻後に書す』『碩水先生遺書』巻六）と述懐している。

⑧ 『碩水先生遺書』巻二。

⑨ 同上、巻四の跋。

⑩ 同上、巻三。

⑪ 同上、巻三。

⑫ 『幕末維新朱子学者書簡集』（朱子学大系14 明德出版社 一九七五）一八四頁。以下『書簡集』と略記。

⑬ 『楠本端山碩水全集』所収（葺書房 一九八〇）以下『全集』と略記。

⑭ 『書簡集』五七頁。

⑮ 『碩水先生遺書』巻四。

⑯ 『書藤森弘庵書後』『碩水先生遺書』巻六。

⑰ 『読春秋胡氏伝』は『碩水先生遺書』巻六に所収。

⑱ 『書簡集』一六五頁。

⑲ 同上、一九三頁。

⑳ 同上、七〇頁。端山にはこの時期、山林中に隠れて才能をみがき、時節を待つという意識があった。

- ⑲ 同上、七一頁。
- ⑳ 同上、七三頁。この書簡が書かれた明治四年、東京の書生で洋学生が漢学生の二倍以上になり、文明開化による急激な西洋学の流行現象があらわれはじめていたごとくである。
- ㉑ 同上、五一頁。
- ㉒ 大橋訥庵（一八一六—一八六二）が儒学の立場から西洋学を論難、排斥した書物で、嘉永五年（一八五二）から同六年（一八五三）にかけて成立。訥庵はこの書物で、技術と思想とを分離して考えるやり方をきびしく批判した。訥庵によればいわゆる和魂洋才などというものは認められないのである。端山は習学時代に訥庵から強い影響を受けた。
- ㉓ 河野健二「東洋のルソー中江兆民」『中江兆民』日本の名書36 中央公論社 一九七〇、二〇頁。松本三之介『明治精神の構造』（NHKブックス 一九八〇）八三頁。
- ㉔ 「崎門学脈系譜附録二」『全集』所収。
- ㉕ 「日本道学淵源録例言」『全集』所収。
- ㉖ 「闇齋学と闇齋学派」『山崎闇齋学派』日本思想大系31 岩波書店 一九八〇
- ㉗ 『書簡集』四三五頁。
- ㉘ 同上、一三二頁。
- ㉙ 同上、一四二頁。
- ㉚ 『碩水先生遺書』巻十一。
- ㉛ 同上。
- ㉜ 『書簡集』一四二頁。
- ㉝ 同上、四一九頁。
- ㉞ 同上。四二五頁
- ㉟ 丸山真男「闇齋学と闇齋学派」『山崎闇齋学派』日本思想大系31 岩波書店 一九八〇
- ㊱ 『増補 山崎闇齋と其門流』（伝記学会編 明治書房 一九四三）
- ㊲ 『書簡集』一三二頁。
- ㊳ 同上。一六二頁。

④2 『碩水先生遺書』卷六。

④3 『書簡集』一二二頁。

④4 同上。七三頁。

④5 『碩水餘草』『全集』所収。

〈付記〉 本稿は昭和六十一年度文部省科学研究費による一般研究(B)『幕末明治期における日本漢学の基礎的研究—北部九州を中心として—』の成果報告の一部である。